

研究課題 (テーマ)		一般病院から精神科病院に転院する認知症者の実態調査 -医療間連携の課題に関する検討-	
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	看護学部看護学科	助教	遠田 大輔
	同上	教授	田中 いずみ
		講師	杉山 由香里
		助教	浜多 美奈子
研究結果の概要			
<p>わが国では急速な高齢化に伴い、認知症者の増加が続いており、認知症者に対する医療連携体制の強化は喫緊の課題である。精神科病院では、一般病院から行動・心理症状やせん妄等によって対応困難となった認知症者が転院しており、症状改善に向けた治療が行われている。しかし、一般病院との連携を行う中で、精神科病院に移り加療が必要な認知症者の状態像は明確化されておらず、どこまでを一般病院で加療し、どこからを精神科に委ねるかの判断は難しく、そのモデルも確立されていない。そこで本研究は、精神症状の悪化により一般病院から精神科病院へ転院する認知症者の実態を明らかにすることを目的とした。</p> <p>一般病院から単科精神科病院に転院した認知症入院患者を対象とし、患者の診療録を後方視的に調査した。認知症者の属性、臨床的特徴、入院前の家族背景、介護状況などを調べた。対象患者を、早期に退院した者（予後良好群）と入院長期化、または入院後に死亡・転院した者（予後不良群）の2群に分け、両者の違いについて統計学的に分析した。</p> <p>転院理由となった患者の精神症状は、攻撃的態度や不眠が多かった。一般病院では運動器（骨折など）、消化器の病変で加療していた者が多く、内科からの転院が6割だった。患者の約半数が予後不良群に該当した。予後良好群と不良群を比較した結果、予後良好群は身体合併症が少なく、Charlson 併存疾患指数が低いことなどが示された。</p> <p>多くの身体疾患を合併している患者に対しては、身体疾患の症状コントロールができた状態で転院を判断することや、精神科病院に移ってから継続的に身体疾患をフォローできる連携の構築が必要と考える。</p>			
今後の展開			
<p>本研究により、一般病院から精神科病院に転院が必要となる認知症患者の実態が示された。今後、更に対象数を増やして、多変量解析を行う。研究成果を学会発表し、ジャーナルへの投稿を行う予定である。今回は単施設における調査であったため、対象施設・地域を拡大し、結果を検証していく必要がある。</p>			